



THE DAILY NEWS

KOBE 2024 PARA ATHLETICS WORLD CHAMPIONSHIPS

Fri 24 May

DAY 8

Japanese

Yesterday's Highlight

ライバル対決から生まれた、世界新記録のストーリー

1994年にスタートしたパラ陸上競技の世界選手権。これまでも数々の見応えある名勝負が繰り広げられてきた。今大会は、その11回目。競技7日目の5月23日も、歴史に残るライバル対決が見られた。記録と、記憶に残る世界新記録の戦いの物語。



■ T36女子200m

日が少し落ちかけた18時前、脳原性まひなどのT36クラス、女子200mがスタートしようとしていた。7選手中、注目は東京パラリンピック金メダルで世界記録（28秒17）保持者のシー・イーティン（中国）と、昨年のパリ大会を制した世界チャンピオン、ダニエル・アイチソン（ニュージーランド）の二人だ。

数年来の好敵手で、東京パラリンピック200mではシーが世界新で連覇を果たし、アイチソンが初出場でも2位に入った。3日前に行われた同100mではシーが、アンチソンが持っていた世界記録を0秒06更新する13秒5の新記録で優勝。アンチソンが13秒48の2位で続いた。はたして、200mではどんなドラマが見られるのか……。

号砲から鋭い飛び出しを見せたのは6コースのシーだった。得意のスタートからスムーズな加速でコーナーの出口をトップで抜ける。7コースのアンチソンがすぐ後ろに続き、この時点で勝負の行方はこの二人に絞られた。

直線に入ると、アンチソンがギアチェンジ。伸びやかなストライドでグイグイ加速すると、残り50m手前でシーをとらえた。アンチソンのスピードはなおも増し続け、力強いフォームのままトップでフィニッシュラインを駆け抜けた。



タイムは27秒47。それまでシーが持っていた世界記録を一気に0秒7も更新する、見事な世界新記録だった。5mほど遅れて2位で入ったシーの記録もまた、これまでの世界記録を0秒11上回る好タイムで、アジア新記録となった。



フィニッシュ後、トラックに膝をつき、肩で大きく息をしながら達成感をかみしめているような表情のアイチソンのもとに、シーがゆっくりと歩み寄り膝を折ると、二人は互いを称え合うようにハグした。

その後、ミックスゾーンにやってきたアンチソンに声をかけると、満面の笑顔でこう、声を弾ませた。「前を追っていい走りができたし、すごいタイムも出て、本当に幸せです！」

さらに、フィニッシュ後にシーとハグした時、どんな言葉を掛け合ったのかを尋ねると、「彼女は英語を話せません。ただハグして、お互いの喜びを共有しあっていました。彼女はとても素敵な人なのです。これからいいライバルとして成長しあっていきたいです」
そう話すアンチソンの背後を、シーが微笑みながら見つめ、通りすぎていった。

アンチソンは22歳、シーは26歳。まだまだ続くであろう競技人生において、二人はこの先、どれだけの名勝負を見せてくれるだろうか。

■ **T13男子400m**

18時27分に始まった視覚障がいのクラスT13男子400mには、前回パリ大会では欠場したアルジェリアのスカンデルジャミル・アスマニが出場した。アスマニは、2021年に東京パラリンピックで46秒70の世界新記録を樹立し金メダルを獲得した選手である。昨年のパリ大会では日本の福永凌太がこの種目47秒79の記録で優勝した。約1年を経て、さらに強化した福永が、世界記録保持者を退けるのか。それとも、世界記録保持者であるアスマニが、迎え撃つのか。注目のレースとなった。



福永は6レーン、そのすぐ外側のレーンにアスマニがいる。福永はアスマニの走りを見ながら追いかける。号砲が響き渡ると、福永は低い姿勢のまま飛び出した。一方、アスマニも弾丸のような加速で、次々と他の選手をごぼう抜きしていく。バックストレートから第2コーナーを回る頃には、アスマニは一人トップを走っていた。そのままの勢いでフィニッシュラインを駆け抜けると、自身の持つ世界記録を更新する46秒44で世界新記録を樹立した。

「素晴らしいスタートを切れたことで、世界新につながった。この記録は私だけのものではない。一緒にずっとやってきたコーチ、まるで家族のようなコーチも我がことのように喜んでくれた。コーチとの協働で取れた世界記録だ」と、アスマニが早口でまくし立てた。

昨年のパリ大会では400mを欠場している。コールルームへの招集時間に数秒遅れたことで失格となったのだ。「だから、今大会では絶対に遅れないように10分前にはコールルームに行っていたよ」。

昨年の金メダリストの福永を見据えて、アスマニはレースプランを練っていた。「それは、凌太がすぐ後ろにいて、“彼が追いつこうとしているぞ、彼が追いつこうとしているぞ”と自分に言い聞かせて走ることだった。彼から逃げるようにね。そうやって走ったら、世界新の記録になったのだ。つまり凌太が世界記録に導いてくれたんだよ」。

初めて世界記録保持者であるアスマニと戦った福永も、「バックストレートですでにアスマニ選手の速さに驚いていました」と、振り返った。「普段の練習では、45秒台で走るトレーニングパートナーと練習しているので、特別な驚きはなかったけれど、自分には何が足りないのか、もう少し時間をかけてしっかり見直したい」。

アスマニは、初めて福永と走ったことで、より福永の印象を深めた。「すごくいい選手。もっともっとタイムを出しきるはずだ。パリパラリンピックでも成長した凌太と走ることになる。彼は、我々がより速く走るための、最高のライバルだと思う」。



アスマニは、100日後に控えたパリパラリンピックの400mで45秒台を狙っていくという。「ライバル選手のことは本当に尊敬している。でも、トラックに立ったら、あとは自分自身と戦うこと。自分をリスペクトすることで、ライバルもリスペクトすることになる。パリではみんなの健闘を祈りながら、新たな世界記録に挑戦するつもりだ」。

アスマニの背中を追いかけた福永も「アスマニ選手は最大のライバルです。でも、陸上競技では、自分のライバルは自分自身だと思っている。アスマニ選手は確かにすごい。でも、追いつけないわけではない。自分自身を信じて日々一つひとつの課題に向かって積み重ねていけば、きっと到達できるはずです。それがパリパラリンピックかどうかはわからないが、それでもパリに向けて取り組んでいきたい」。

ゴール後、アスマニと福永はハグで互いの健闘を讃え合った。新たなストーリーが、神戸2024世界パラ陸上で幕を開けたのだった。

GO KOBE 2024!

学校観戦会ででダイバーシティを体感

神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会初日から、ユニバー競技場には大歓声が響いている。声援を送っているのは、神戸市内を中心に兵庫県内にある小学校・中学校・高等学校・特別支援学校、約200校、3万人（全日程総計）もの児童・生徒たちだ。



気持ちのいい快晴となった5月21日（木）に観戦に訪れた学校の一つ、神戸市立神戸祇園小学校の児童たちは、モーニングセッションを観戦。目の前で繰り広げられる投てき台のやり投げや、レーサー（競技用車いす）のトラックレースなどを応援していた。

その中の一人、5年生の矢形一起さんは、普段はラグビーのチームに所属しているスポーツ少年。以前、一度、クラブチームでの体験会で車いすバスケットボールなどで使用する競技用車いすに乗ったことがあるが、パラ陸上の観戦は初めてだとか。

「一般の陸上競技と同じようにすごいスピードでレースをしていて、めっちゃ、かっこよかった！」と、拍手を送っていた。「どの選手も、最後まで諦めずにゴールしている姿が、かっこよかったです」。

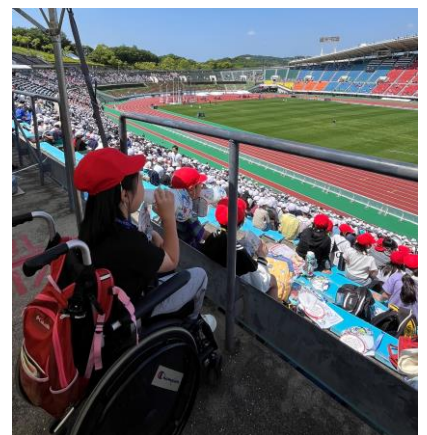
学校には、車いすで通学する友人も一緒に机を並べている。

「今回、パラ陸上を観戦して、いろんな障がいのある人がいることがわかりました。学校でも車いすを使っている人がいます。その人と一緒に遊べるような工夫を考えて、障がいのある人もない人も、一緒に楽しめることを考えたいと思いました」と、力強く語ってくれた。

同じ5年生で、病気のため3歳から車いすを使用している森下莉桜さんも、パラ陸上の観戦は初めてだった。

「普段私が使っている車いすとは全然違う。形も違いますが、前屈みで漕ぐスタイルで、すごく速い！」。

パラスポーツでは、車いすに乗ったまま楽しめるポッチャを体験したことがあるという。「何度もボールを投げていたら、白いジャックボール（的球）に当てることができるようになりました。ポッチャも楽しかったけれども、今日パラ陸上を見て、絶対に陸上競技の車いすに乗って走ってみたいと思いました」と語る。近い将来、森下さんが車いすのパラ陸上選手として、世界の舞台上で活躍する姿が見られるかもしれない。





神戸祇園小学校には、公立小学校として唯一、難聴学級がある。その難聴学級5年生の松井絢音さんも、矢形さん、森下さんとともに初めて見るパラ陸上に感動した一人だ。「テレビでは見たことがありましたが、競技場で実際に観戦するのは初めてです。視覚障がいの選手がガイドの人と一緒に協力しながら頑張っている姿を見て、すごいと思いました」。また、目の前で繰り広げられるやり投げの試技を見ながら、「投てき台に座ったまま、あんなに遠くにやりを投げる！」と、目を丸くしていた。ボランティアが投げたやりを選手の元に運んだり、選手が投てき台に乗るためにアシスタントがサポートする姿が印象的だったという。「人と人が協力している姿を見て、友だちを大切にしたいと思いました」。

同校の総務担当教員の竹尾康弘先生も、パラ陸上の観戦は初めてだったとか。「子どもたちが投てき台の選手が投げるやり投げの飛距離や、大きく体を反らせる上半身の動き、選手たちの筋肉隆々の姿を見て、どうやったらあんなふうに投げられるようになるのだろうと、いろんなことを語り合っていました」。

竹尾先生は、パラ陸上の観戦会は、ダイレクトに子どもたちの心を揺さぶる学習になるはずだと語る。「我が校では、難聴の児童も、車いすの児童も通学しています。さまざまな障がいのある選手が活躍する姿を実際に見て、感じたことで、人と自分を大切にすることを育ててほしいと思いました」。



観戦会でパラ陸上を応援した児童・生徒だけでなく、スタジアムで真剣勝負を展開した選手たちから、「ものすごく子どもたちの声援が嬉しくて、いつも以上に力をもらいました」という声が聞かれた。

自分のレースが終わった後、子どもたちのいるスタンドに出向いて、一緒に写真を撮ったり、サインに応じたりする選手の姿も。視覚障がいの選手は大きな声援のするスタンドによじ登って、子どもたちと自分の体をパンパン叩いて音を出すパフォーマンスを一緒に楽しんでいた。「日本語はできないけれども、応援してくれる子どもたちに“ありがとう”を伝えたい！」。

神戸2024世界パラ陸上は、子どもたちとトップアスリートとの貴重な交流の場になっている。子どもたちだけでなく、世界で活躍するトップアスリートにとっても、今大会で体験したコミュニケーションは、深く心に刻まれることだろう。

